「いやー、いい天気だねえソーニャちゃん」
満足げに、うん、と伸びをするやすなに、ソーニャは空を見上げて顔をしかめた。
「……どこがだ」
昼過ぎあたりまではたしかに見渡す限りの青空が広がっていたが、下校時刻となったいまは空一面が灰色の雲にすっかり覆われており、とても「いい天気」などと表するような空模様ではない。
こいつの脳内の言語体系はどうなってるんだ、と訝しげな目を向けるソーニャだったが、やすなはそんな視線になどまるで気づいていないかのように、
「だって、クリスマスだよ！」
と嬉しそうに答え、それがますますソーニャを混乱させた。
「待て、クリスマスがなんの関係があるんだ」
「もー、ソーニャちゃんは風情がないなあ」
ちっちっちっ、としたり顔で指を振るやすなにイラっとさせられながら、
「お前にだけは言われたくないぞ」
と手が出そうになるのをかろうじて理性で抑える。
「クリスマスって言ったら、雪！　ホワイトクリスマスでしょ」
「雪……ああ」
ここまで聞いて、ようやくソーニャにも理解することができた。
「……たしかに、いまにも雪でも降り出しそうな空だな」
襟元を抜けていく風の冷たさに、ソーニャがマフラーを巻き直す。
吐き出す息が白い。
見上げる曇天からは、たしかにいつ雪の粒が落ちてきてもおかしくはなかった。
「でしょ？　まさに絶好のクリスマス日和！」
えへん、とやすなが胸を張るのを見て、ソーニャが溜息をつく。
いい天気、という言葉が当てはまるかどうかはともかくとして、たしかにこれで本当に雪でも振ってくれれば、クリスマスにはぴったりだろう、とは思う。
ただ。
「そうだな。今日がクリスマス当日だったらな」
「……あれ？」
まだ、クリスマス・イブ――聖なる夜は、十日以上も先のことなのだった。

「だってほら、駅前とかさ、もうクリスマス一色じゃない！」
たしかにな、とソーニャは街の様子を思い浮かべる。
ついこの前までハロウィンだとかでオレンジ色の薄気味悪いカボチャばかりだった店などが、終わった途端に赤と緑と白のクリスマストリコロールに変わっていた。
まだ十一月になったばかりだというのに街のそこかしこにクリスマスツリーが立てられているのを見て、気が早いなとあきれた記憶がある。
「だからあれだよ、今日とかもう実質クリスマスみたいなものなんだよ！」
「そう言うお前の頭の中は一年中クリスマスみたいなものだな」
「んんー？　わたし、褒められてるのかな？」
まあいいや、とクリスマスソングを鼻歌で歌い出すやすなに、本当にお気楽なやつだな、とソーニャは肩をすくめた。
いま隣にいるのは、クリスマスも盆も正月もない世界で生きてきた暗殺者であることを、コイツは忘れているんじゃないだろうか、と。
いや、あれだけ散々痛い目に合わせられてきたのだから、忘れているということはないだろう。
ただ、気にしていないだけだ。
コイツにとって自分は、きっと単なる友達で――
「ところでソーニャちゃん！」
唐突に目の前に顔を出されて、ソーニャはうおっ、と思わず後ずさった。
「突然出てくるんじゃない！」
やすなの頭に手刀を入れる。
「痛い、痛いよソーニャちゃん！」
「お前が驚かせるのが悪いんだろうが」
「普通に声かけただけだよう」
たしかに、考えごとをしていて注意力が散漫になっていたようには思う。
暗殺者としてはあるまじき失態だ、とソーニャは内心で猛省した。
「もー、ひどいよソーニャちゃん」
叩かれた箇所をさするやすなを無視してソーニャは視線を逸らす。
「うるさい、なにか言いたいことがあったんじゃないのか」
「そうそう、ソーニャちゃん、クリスマスと言えば？」
「世界が血の赤に染まる」
「違うよ！　たしかに赤だけどそんなにバイオレンスじゃないから！」
「戦場のメリークリスマス」
「そういう戦闘的なあれから離れよ？　ね？」
「結局なにが言いたいんだ」

「もー、プレゼントだよプレゼント！」
ほら！　とやすなが道の先を指さす。
二人が歩いている路地の先はＴ字路となって大通りに繋がっており、それを渡った反対側に駅へと繋がる商店街がある。
そこはすでにクリスマス向けの装飾で染められており、あちこちからクリスマスソングが聞こえてきていた。
「ほら、もうどこのお店もクリスマスのセール中だよ！」
たしかにやすなの言うとおり、ケーキショップやおもちゃ屋などはもちろんのこと、まったくクリスマスと関係のなさそうな店舗までなんとか年に一度の聖夜の祭典に便乗しようとあの手この手で売り出しを行っている。
「で？　お前が私になにかくれるのか？」
「やだなあ、ソーニャちゃんが、日頃のわたしの友情に感謝してどーんとプレゼントをくれ……あ、待って！　どこいくのー！」
なにを言い出すのかと思えば、と引き留めるやすなの声を無視して歩き出すソーニャ。
感謝するどころかむしろされたいくらいだ、とソーニャは思う。
だいたいプレゼントと言われても、なにを用意すればいいというのか。
食べ物、アクセサリー、洋服……選択肢が広すぎて、ソーニャには検討もつかない。
なにを用意すればやすなは喜ぶのか。
そこまで考えて、ソーニャははっとなって首を振った。
いったい私はなにを考えているんだ。
なぜ私が、アイツの喜びそうなプレゼントなんかで頭を悩ませなければいけないのか。
クリスマスなんて、私には、縁のない行事で。
「もー、ソーニャちゃんてば！」
と、背中から声をかけられ、ソーニャの身体が咄嗟に反応する。
身体をやや半身にひねりながら、自身の背後に向けて拳をバックハンドで振り抜く。
それは暗殺者として、自らの身を守るためのソーニャの言わば条件反射に近い動作だった。
が。
「きゃっ！」
その拳が振り抜かれる――そして、やすなを直撃する――手前のところで、それは何者かの手によって受けとめられていた。
「な!?」
即座に腕を引き、そのままその勢いで後方に跳びすさる。
「び、びっくりしたあ」
見ると、ソーニャの攻撃を受けとめていたのは、まだ小

学生くらいの少女だった。
腰までありそうな金髪を頭の左右でまとめ、赤い瞳を大きく見開いてソーニャを見ている。
白をベースに黒のラインの入ったロングスカートにセーラーの襟は、どこかの学校の制服だろうか。
「あーもーソーニャちゃん！　だめだよこんな小さい子に手を出したら！」
周囲に聞かれたら誤解されそうな言葉を口にしながら、やすなが少女に駆け寄る。
「ねえきみ、ごめんね、ケガしてない？」
「あ、はい、大丈夫です。こちらこそ、ぼうっとしててごめんなさい」
そう言って小さく頭を下げた少女だったが、ソーニャは警戒を解くことなくじりじりと少女との距離を測っていた。
どう考えてもただ者ではない、というのがソーニャの見立てだった。
おそらく自分のすぐ脇をちょうど通りかかったのだと思うが、その気配にソーニャは気づくことができなかった。
そのうえソーニャ自身ほとんど無意識的も言える速度で放った拳を、充分スピードがのる前とはいえ当たる寸前に手の平で受けとめていたのだ。
「やすな、離れろ」
少女から視線を外さずに、ソーニャが告げる。
「え？　ソーニャちゃんどうしたの」
「離れろ！」
その真剣な声に驚き、言われるままにやすなが少女から離れる。
「おい、お前何者だ」
ソーニャが尋ねるが、少女は不思議そうに首を傾げ、
「あ、あの、なにか」
と問い返してきた。
「どこかの組織の人間か？　私を狙ってきたのか」
さらに問いかけるソーニャに、少女は戸惑いながら答える。
「いえ、あの、私はフェイトって言います。聖祥大付属小学校の四年生で、いまはちょっと買い物に行くところで」
その言葉に嘘はないように思えたが、その身のこなしはどうしてもただの小学生のものとは思えなかった。
「もー！　ソーニャちゃんどうしちゃったの！」
と、ついに我慢できなくなったのか、やすながソーニャと、フェイト、と名乗ったその少女のあいだに割って入る。
「ごめんね、あのお姉さんちょっと危ない人だから」
とまた誤解されそうなことを口走るやすなに、
「い、いえ、私こそ考えごとしながら歩いていて、ご迷惑おかけしたみたいであの」

と何度も頭を下げるフェイト。
その姿に、少なくとも敵意はなさそうだと判断したのか、ソーニャもようやく警戒を緩める。
自分を襲おうと思っているなら、この短い時間のなかでもいくらでも手段はあったはずだ。
だが、そんなそぶりは微塵も見せなかった。気配を伺っている様子もない。
「よし、とりあえず」
と言うが早いか、ソーニャはやすなに立て続けに手刀を二発入れた。
「いたた！　なにするのソーニャちゃん！」
「人を危険人物みたいに言うな、まったく」
「だって実際に危険だし……」
「なにか言ったか？」
「ナンデモアリマセン」
「あ、あの、喧嘩はよくないと」
突然目の前で始まった二人の会話が言い争いに見えたのか、慌てて二人を止めようとするフェイトに、やすなは大丈夫だよと笑いかける。
「わたしたち親友だから。ね、ソーニャちゃん」
「誰が親友だって？」
「わたしと、ソーニャちゃんが！」
「残念ながら、私はそんな風に思ったことはないな」
「またまたーソーニャちゃんってば照れちゃって」
「誰がだ！」
またしてもソーニャの手刀をくらいながら、ね、と笑うやすなに、フェイトもようやく安心したのかおかしそうに微笑んだ。
「本当ですね、ちょっとうらやましいです」
フェイトの言葉に、
「いやあ、それほどでも」
と首を振りながら、しかし満更でもないといった様子でやすなが笑う。
「私にも、大切な友達はいるんですけど、お二人みたいな感じではなくて」
「そうなの？　最近仲が上手くいってないとか？　ケンタッキー？」
やすなの問いに一瞬きょとん、としたフェイトだったが、横からソーニャがフォローを入れる。
「……もしかして、倦怠期のことか？」
「そうそれそれ、さすがソーニャちゃん」
「ああいえ、そういうことではないんですけど」
フェイトが苦笑する。
「ただ、もっと仲良くなりたいというか、もっとあの子のことを知りたいなって思うことがあるんです。いまもそれで悩んでて」